

寫眞機の少女(しゃしん
きのしようじよ)

butai yukkuri

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大洗女子学園の活躍を見て憧れを抱いた少女天馬凪は一人で戦車道に挑戦する。

彼女乗るのはクーゲルパンツァー。武装が無く、装甲厚は5ミリメートル。戦車と呼
びたくない代物で闘う少女を描いた苦難の物語である。

※隙間時間に何も気にせずぱぱっと書いたものなので不備だらけです。ご了承下さ
い。

目 次

戦車道を始めたいです！	1
「戦車道がしたいです！」	—
「これは・・・戦車？」	—
「児玉七郎さん、お願ひします！」	—
13	8 1
「文科省へ行きます！」	—
「案外上手くいきましたね！」	—
25	18
「戦車道ショップです！」	—
「練習です！」	—
初めての試合です！	—
試合を申し込みます！	—
46	40 32

「弾薬の用意をします！」
「作戦会議です！」
—

戦車道を始めたいです！

「戦車道がしたいです！」

「プロローグ」

西住みほら大洗女子学園が優勝を飾った戦車道全国大会。大洗女子学園の栄光を目にし、友人を誘い外道に徹する武者もいれば、たつた一人で戦車道に挑むものもいた。

◇ ◇ ◇

彼女たち、大洗女子学園は凄かつた。

数々の強豪校を相手にギリギリではあつたが勝利し続けていた。

サンダース、アンツイオ、プラウダに続き黒森峰まで彼女たちにはかなわなかつた。

毎回戦術ドクトリンに囚われずに奇妙な戦術を使い、誰も予想できないような戦いをしていた。

西住みほとはどのような人物なのか、そんなことばかり考えながら少女、天馬凪は大洗女子学園戦車道全国大会優勝の表彰式をテレビ中継で見ていた。

隊長の西住みほに抱きついているのは誰だろうかなどとどうでもいいことを考えながら、夕日に照らされた少女たちの映るテレビ画面をパシャリと写真機で撮った。

◇ ◇ ◇

朝起きて、まだ昨日の感動が残っていた。

夕日に照らされる選手たちの涙。

風になびく優勝旗。

その旗に描かれた鷲と戦車。

どれをとっても全て網膜に焼き付いている。

凧は気付いていた。自分が既に戦車道というスポーツに魅了されているということ。
そして決意した。自分も戦車道をしようと。

さようなら昨日までの陰キャな自分、ようと今日からの充実した毎日。そう心の中で唱えて決心を固めた。

だが凧の通う学校、私立川跡学園高校には戦車道の授業はなかつた。

ただし、学校で戦車道のようなものを見たという噂もその学校にはあつた。

もしかしたらその噂を知らなかつた方が凧の為だつたのかもしてない。そうなれば、大洗女子学園のように下克上できるという希望を持つて、無謀な戦いに挑むこともなかつたのだから。

「戦車道をしたいです！」

「失礼します。」

凧は生徒会室に来ていた。戦車道を学校でできるようにしてもらう為だ。もし噂の戦車が見つからなくてもその時は自分で戦車を買ってでも戦車道をするつもりだつた。よほどのお金持ちでもない限り、こんな小さな学園艦内に個人で戦車を持てる人間なんていない。

それに学校の中で戦車を見かけたという噂なのだから、学校の備品であると考えるのが自然だろう。

生徒会室には生徒会長、鎌田牡丹がいた。普通、生徒会長がずっと生徒会室にいるなんていうことはないはずだが、お決まりというやつらしい。

牡丹は会長らしくなかつた。なぜか脇を開いてガオー、と今にも言いそうなポーズでこちらを見ている。ちらちら見えている八重歯、左右で色の違う薄緑の髪とアホ毛もあいまつて、とてもアホそうに見えてしまう。生徒会長という地位から想像していた姿とはかけ離れている牡丹を目にし、凧は少し戸惑いが隠せなかつた。喋り出すこともできず、数秒間の沈黙が続いた。もしかしたら普段から会話を楽しむような人間ならばノリで返せたのかもしれないが、凧には到底無理な事だつた。

先に動いたのは牡丹だつた。

「それで、天馬さんはここに何をしに来たんですか。」

見た目とはまるで違い、とても真面目な口調だった。ギャップ萌えと言われるような牡丹のキヤラに、小説や漫画で見るようなただただ真面目な生徒会長なんてこの世に存在しないのかと思いながら凪は答えた。

「この学校で戦車を見たという噂を聞いたので、今は授業がないだけで昔の戦車があるのではないかと思い、会長に貸し出しの許可を頂けるならばお借りしたいなと思って。」「まさか君が言い出してくるとはねえ。君は思いついても行動なんてする人間じやなかつたのになあ。で、その戦車で何がしたいんですか。」

当たり前の質問が返ってきた。昨日までの自分の評価も聞こえてはいたが、今日からは昨日までの自分じやない。あえて話を長くするようなことはしたくなかったので、牡丹からの評価を訂正させるような真似はせずに、質問に即答した。

「私、戦車道をやってみたいんです。それでこの学校には戦車道がないので個人でやりたいなと。」

凪には考えがあつた。学校が戦車のような高価な物を貸し出してくれるわけがないし、そもそも戦車道は一人でできるわけがない。最低でも砲手と操縦手が必要だからだ。こうやって嘆願すれば何らかの形で学校が戦車道を始めてくれるだろうと思つた。生徒会なら部活申請か、もしくは学校に掛け合つて選択授業に取り入れてくれるかと

思っていた。

牡丹の答えは凪の思惑通りだった。

「そういうことなら同好会にしてしまいましょう。人数が足りないから部活のように多くの部費は出せないけれど、学校の備品の貸出くらいはできるでしょう。」

成功した。そう凪は思った。最低あと操縦手の一人集まれば戦車道ができるようになるのだ。そして凪は一番大切なことを聞いた。

「この学校の備品の戦車は何があるんですか。」

この質問の答えによつて多くのことが変わつてくる。戦車道にはレギュレーションが存在するからだ。終戦前に開発、もしくは試作されている戦車でないと出場できないルールだつたはずだ。

「ちよつと待つていて下さいね。書類を探すので。」

そう言つて牡丹は書類の沢山収まつてゐる棚から書類を取り出した。こちらも牡丹の外見の印象と違つてしまつかり整理されてゐるようだつた。

「これが学校の保有している戦車の一覧です。」

凪の前に差し出された書類は薄かつた。この学校はあまり戦車を保有していないようだ。

だがまだ一人の彼女には多くの戦車なんて必要ない。一両あれば十分なのだ。

凪はペラペラと書類をめくつていった。その書類には一枚一枚戦車の写真と大まかにスペックが書かれていた。

ただ一つ問題があるとすれば、写真部分に売却済みというハンコが押されていたことだ。リストには四号戦車にチト、ブラツクプリンスまであったが、まだ学校にある戦車はほぼなかつた。そう、ほぼなかつたのだ。一つを除いて。

唯一売却済みのハンコが押されていない戦車の名称はクーゲルパンツァーとなつていた。

凪はそんな名前の戦車を聞いたことがなかつた。

だがそれは仕方のない事だった。そんな戦車を競技に出す学校なんて存在しなかつたのだから。

しかもよりもよつてその戦車だけ写真の部分が擦れ、見れる状態ではなかつた。凪は牡丹に聞いてみることにした。

「会長、このクーゲルパンツァーという戦車はどのような物ですか。」

牡丹もこの学校の生徒だ、学校に何十年もいるわけじゃない。古い昔使つていた戦車のことなど知るはずもない。

一応凪もそれを理解していたが、聞いてみずにはいられなかつた。

「私も細かいことは知らないんです。でも、保存場所はわかるので行きましょうか。た

だし、同好会申請をしてからです。同好会でもなく個人に戦車を貸し出すわけにはいきませんでしよう?」

凪は一秒でも早く戦車を見たかつたが、牡丹の言つてることも理解できるので仕方がなかつた。

凪はさつさと同好会申請用紙を書いた。細かい活動内容については戦車の現物を見てから決めるということで双方の意見が一致したので特に問題にはならなかつた。



凪と牡丹は学校の物置区画に来ていた。

周りは学校の備品がぎっしり詰まつた倉庫が埋め尽くしていた。倉庫街と言うのが一番適しているのだろうか。戦車はこの物置区画の端に、戦車の軒下を雨除けにする形で保存してあるらしい。

凪は今にも鼻歌を歌い始めそうだつた。もしかすれば自覚していないだけで歌つていたのかも知れない。それほどまでに気分がよかつた。これから自分の乗る戦車を見るのだから。その戦車に乗つて動かすことができるのだから。

「さあ、これですよ。」

牡丹に連れられた先にはしつかりあつた。凪が憧れる戦車というものが。そう、そこにはしつかりあつたのだ。クーゲルパンツァーが。

「これは・・・戦車?」

「これは・・・戦車?」

「え。」

それしか出なかつた。

あまりにも困惑しすぎて一切他の言葉が出なかつた。

ふと横を見ると、牡丹の目は不思議そうにこちらを見ていた。

「どうかしたんですか。待望の戦車ですよ。」

凧の前にあるのは確かに戦車だつた。

戦車ではあつた。

だからそこにあつたのは大きいボールだつた。球に補助輪が付いただけの物体だつた。

「これ、武装付いてるんですかね。ただのボールに見えるんですけど。」

「付いてないです。」

即答だつた。

「あの、これでどうやつて戦車道すればいいんですか。」

「私にはわかりません。ですが貸し出せる戦車はこれしかありません。」

書類に書かれていた戦車の中で売却済みでなかつたのはこの戦車だけだつたのでわかつていたことだ。他に戦車のあてもないので気を取り直して借りられるかの確認をしておく。

「でもとりあえずこの戦車をお借りできるんですよね。」

「勿論です。」

とりあえず戦車の確保はできた。だが問題はまだ残つている。大会に出ることができたとしても武装がないことだ。幸い一人しか乗れない戦車のようなので人数不足の心配は無くなつた。

とにかく武装がないと試合に出れたとしても敵車両を撃破することはできない。そのため、戦車道のレギュレーションに違反しない武装を探さないといけないが、凧にはクーゲルパンツァーがどんな戦車なのかがさっぱりだったので調べてみるとした。

「この戦車をどう使うか考えたいのでしばらく同好会の開始を待つてくれませんか。」

活動開始もできないのに同好会の予算をもらうわけにはいかないだろう。

「もちろん大丈夫ですよ。なんなら同好会の部室をこの倉庫の空き部屋にしましよう。まあ戦えない戦車で活動開始しろというのも酷な話ですからね。この戦車でどう活動できるかが決まるまでは予算を渡すわけにはいきませんが、ある程度決まれば国からの

補助金も出るだろうしまた生徒会室に来て頂戴。雨ざらしに置いておくわけにはいかないから部室の方はこちらの方ですぐに手配しておきます。」

牡丹はニヒツと笑つて言つた。



何もしない状況で部室を借りているのも悪いので凧は早く帰つてクーゲルパンツァーと詳しい戦車道のレギュレーションについて調べ直していた。

戦車道のレギュレーションは、終戦までに戦線で活躍するか設計が完了し、試作されていた車両と、それに搭載予定だった部品のみに限られていた。だがそれに反しない限りどれだけ改造しても問題ないようだつた。

そしてクーゲルパンツァーは、ドイツ製の車両で日本語訳は玉戦車らしい。おそらく日本に輸出され、おそらく偵察車両で装甲厚は5ミリメートルしかないらしい。つまりハンドガンの弾丸でさえ貫通する。

らしいというのも、ソ連が鹵獲したものの弾痕などが一歳なく、日本にもソ連にも記録が残つていなかることだつた。偵察用というのも見た目からの推測であつて、確証はない。博物館に展示されていた際の説明文が「#37」だつたという。

エンジンは単気筒の2ストロークエンジン、つまり原付車両と同じタイプのエンジンらしい。現在の原付には性能を下げるリミッターがついているが、それがなければなか

なかの性能を引き出せるらしい。現代の技術で原付エンジンの性能を最大限引き出せば、チャーチル戦車と同じ時速20キロメートルくらいは出るだろう。

武装は搭載されていないが、ソ連が鹹獲時には塞がれていた通信ケーブルもしくは小銃の先を出す用と推測される穴があつた為、歩兵が携帯する武器を持ち込んで使つていたと推測されているようだ。

これは戦車道連盟との交渉次第だと思うが、うまく交渉すれば戦中に開発された歩兵用の対戦車兵器を持ち込めるだろう。搭載する予定なら広い意味で現代兵器も使えるかもしれない。今も使われていたら現代の兵器を持ち込んでいると思われるので搭載する予定と言えなくもないだろう。許される可能性はゼロに等しいが。

とにかく戦車道連盟に相談してみないことには武装を購入しても無駄になる可能性が高いので、牡丹に戦車道連盟に近い港に寄つてもらえるよう相談することにした。

◇ ◇ ◇

翌日早速生徒会室に行くと、凧が一晩で考えをまとめてくると思っていなかつたらしく、驚いたような顔をしていた。

「昨日のあの戦車なんですが、偵察車両で歩兵が携帯する武器を持ち込んで使用する戦車だつたようです。どんだ武器を持ち込んでいいのかを戦車道連盟の方に相談したいので連盟近くの港に寄港させて貰えないかと思つて相談に参りました。」

そう言うと、牡丹は納得したような顔をした。

「そうだつたのか。どうりで他の戦車の改造パーツや砲身を購入した履歴はあるのにクーゲルパンツァーに関するものは無かつたわけだ。」

どうやら牡丹は昨日と今日で戦車に関する書類に一通り目を通しててくれていたらしい。

「寄港の件だけど、もちろん大丈夫だよ。そうでない活動始められないんでしょ。同好会を作る書類もあるんだからしつかり協力するよ。」

どうやらこの学校でも生徒会の権限は大きいらしい。

結局生徒会が戦車道連盟にアポを取り、次の週末に寄港してもらえたことになつた。

「児玉七郎さん、お願ひします！」

「児玉七郎さん、お願ひします！」

凪と牡丹は日本戦車道連盟会館前に来ていた。なかなかにしつかりとした建物で、庭には第一次世界大戦時のイギリス陸軍戦車であったマークAハイペット中戦車が置かれている。二人には戦車の知識がほとんどないのでわからないが、きっと日本戦車道に大きな影響を与えたのだろう。だが、ここが戦車道連盟の本部なのだと思うと何か感慨深いものがあった。

戦車道連盟の組合長とは待ち時間も殆どなく、案外すんなり会うことができた。アボを取つたのだから当たり前なのだが、それでも凪にはとても長い時間に感じられた。

組合長室に入ると、白黒の和装をした男と軍服色の服、いや、軍服を着た女性がいた。日本戦車道連盟で組合長のを務める児玉七郎と、陸上自衛隊富士学校富士指導団戦車導隊に所属する女性自衛官の蝶野亜美一尉だ。彼女は日本戦車道プロリーグ強化委員なのでその話し合いにでもきていたのだろう。

連盟の組合長である児玉七郎は、正直にいうと太つていた。頼りなさそうだった。文

科省と組合員との板挟みになつてゐる為に腰が引けてしまつてゐるのだろうか。交渉事をする相手としては少し心許ない。

「ええと。自校の戦車で使える武装についての相談をしたいということだつたな。」

七郎が今日の話し合いについての確認をする。

「はい。私の学校にある戦車はクーゲルパンツァーという戦車でして、車体に武装が搭載されていなんです。」

凧を置いて牡丹が話を進める。

「そうですか。それでどのような武装を使いたいのかね。」

「対物ライフルなどの歩兵携行の対戦車兵器を使いたいんです。それで使える武装の範囲を相談したくて。」

ついに凧が発言した。しかし、今の言葉だけでは言葉足らずだ。

「範囲というと、どのような範囲なの。」

蝶野一尉がある程度察したような雰囲気で発言した。ある程度こちらの言いたいことがわかつたようである。今回の一件では一見部外者に見える蝶野一尉にも無関係とは言えない。話し合いで決まるルールがプロリーグにも影響を与える可能性があるからである。もしかしたらこの話し合いを聞かせるために七郎が蝶野一尉を呼んでいたのかもしれない。なぎからすれば関係ないが、このフォローはありがたかった。

「はい。戦車道のレギュレーションだと、戦車は戦中に開発されていたものという条件ですが、それに搭載される予定だつて部品ならどのようなものでも搭載可能というルールだつたので。」

「つまり歩兵が自分で武装を持ち込んで撃つ戦車だから現代兵器を持ち込むのも搭載予定と言えなくもないのかということですね。」

流石蝶野一尉である。こちらの言いたいことを的確に当ててきた。

「はい。戦車道の補助金を受け取れても二セット武装を用意はできませんから。」

牡丹が答えた。凪には、二セット用意できない事より同好会の予算と補助金だけで武装を購入できるということに驚いた。かの大洗女子学園も、補助金と他の委員会などの予算をかき集めてやつと四号線車のシユルツエンとヘツツァー改造キットしか購入できていたなかつた。私立川跡学園高校にそれだけの財力があつたのは本当に驚きである。「難しいですねえ。携帯電話のような私物として扱うという手もありますが、文科省が許すかどうか。どう思います、組合長。」

突然判断を迫られて七郎が一瞬焦った顔をする。

「武装も私物だから問題ないと認めてしまつて現代のものを認める助つ人を呼んだ時、洗車も私物だからという言い訳をしにくくなりますからなあ。できれば戦中のものにしてくれるとありがたいんだが。」

頼りなく見えていた七郎も文科省への言い訳を用意していたようだ。確かにいざと
いうときの手立てを日本戦車道連盟から奪うわけにはいかない。いざという時に文科
省から助けてもらえる確率が下がる。私立川跡学園高校は私立のため統廃合の話から
逃れることができていたがいつ文科省がちよつかい出してくるかわからない。世間は
今の文科省にそれほど警戒をしている。

「そうですか。ならば戦中に作られた対戦車兵器ならば承認してくれるという事です
か。」

牡丹が確認する。

「いや、文科省がどう言うかわからないからねえ。私が言うのもなんだけど戦車道競技
に参加するつてことではダメなのかい。」

戦車道競技はタンカスロンと呼ばれ、10トン以下の戦車ならレギュレーションなど
なく、何をしてもいいという非公式の競技である。そのため、スポンサーが付きでもし
ない限り自分で壊した街の修理代などを払わなくてはならない。戦車道が一同好会で
しかない私立川跡学園高校には到底無理な話だ。

「残念ながら我々の予算では戦車道競技に参加することはできません。そもそも補助金
の貰えない戦車道競技では戦車を動かして戦える状態にすらできません。」

補助金があれば武装一式揃えられても、無ければ整備すらできない状況だつたらし

い。予算が多いと思っていた凧は考えを改めた。

「そうなのか。なら文科省に掛け合つてみるしかないなあ。今からで問題ないかい。」

「もちろん大丈夫です。念のために学園艦には明日一杯まで動かないよう命じてありますので。お願ひします。」

聞いた七郎は静かに領くと蝶野一尉に指示を出した。

「蝶野君、明日君も文科省までついてきてくれるかね。」

「はい。私からしても他人事ではありませんので、参加させていただきます。」

凧がそんな大きなところにすぐ行くのかと動搖している間に文科省に行くことが決まつてしまつた。だが日本戦車道連盟でも当日のアポを取るのは難しかつたらしく、翌日の十時からということになつたので、凧と牡丹は一度学園艦に帰り万全の状態で交渉に臨めるよう早く寝るようにした。

～文科省へ行きます!～

～文科省へ行きます!～

その晩、凪はなかなか眠れなかつた。布団には入つたものの眠ることができなかつた。やつと眠れたのは午前三時を過ぎてからだつたろうか。

余談だが凪は一人暮らしだ。私立川跡学園高校に入る際、親が凪用に学園艦甲板に家を一軒買い与えたためである。入学祝いで割引だつらしい。卒業後はどうする気なのだろうと考えたこともあつたが、結局答えは出なかつた。

「凪さん。」

家の外から牡丹の声が聞こえる。ふと横にある時計を見るときすでに八時半を過ぎていた。三時からだと五時間半は寝ているはずなのだがとても眠い。だが急がなくてはならない時間だつた。学園艦から降りて文科省まで行くのに一時間半はかかる。余裕は三十分しかなかつた。ただし時間より前に行くのは当然だろう。もしかしたらそういう問題ではなく上陸船の時間に間に合いそうにないから呼びにきたのかもしれないなどと考えながら凪は「はあい」と言いながら玄関を開けた。

「凪さん。早くいかないと上陸船が行つてしましますよ。」

予想は当たつていたようだ。

「はあい。今行きますう。」

とは言つてみたものの朝食はどうしようと考えていると、外からおにぎり用意してますよと言う声が聞こえてきたので着替えだけ済ませて出ることにした。

着替えて外に出ると牡丹がいた。今日は制服にネクタイをつけている。日本戦車道連盟会館に行く時にはネクタイをしていなかつたので、今日会うのがそれほどの相手だと思い知らされた。覚悟はできていたつもりだつたが、不安が込み上げてくる。

「ほら、早く行きますよ。上陸船に少しは待つてもらえるよう言つてありますが長く待たせるわけには行きませんからね。」

と言いながら手を引っ張つてくる。

「わかりましたからそんなに勢いよく手を引かないでください。コケてしまします。」

牡丹がハツとしたような顔をして手を離す。

「あつすみません。つい。」

謝られたらそれはそれで自分が悪いので悪いことをしたなと思えてくる。だが今はそんなこと考えている暇はないので忘れることにした。

十分くらい走ると、学園艦の端の上陸船乗り場にたどり着いた。上陸船はなかなかの

大きさの船だった。フェリーというのが一番近いかもしれない。だが学園艦と並ぶととても小さい小舟に見えてくる。それほど学園艦が大きいのか。だが私立川跡学園高校は大きい方ではない。その逆で小さいほうだ。他の学園艦の上陸船は並ぶとどう見えるのかなどと考えながら凪は上陸船に乗り込んだ。

「はいこれ。朝ごはんです。」

「あつ有難うございます。すみません用意してもらつちやつて。」

「あ、いえ。私が上陸船の出港時間を言つていなかつたせいでもありますし。」

そういえは聞いていなかつた。こんな大事な日に出発時間を知らないことに気づかない自分は怠慢であると思う。まあ知つていたとしても昨日の晩の状況を考えれば寝坊していただろう。そう牡丹に言おうと思つたが、腹が空いていたのでおにぎりを食べることを優先した。

おにぎりは明太子で非常に美味だつた。明太子だけでなく、米にも出汁を染み込ませてあり、しょっぱいだけでも辛いだけでもなく、深い味わいになつていた。

「有難うござります、会長。とてもおいしかつたです。」

起こしに来てくれた上、朝食まで用意してくれたのだ。お礼を言うのが当たり前だろう。

「いえいえ、大丈夫ですよ。それより凪さん。そろそろ牡丹つて呼んでくださいません。」

これからも長い付き合いになるでしょうし。」

確かにそうだ。一人で同好会をしていく上で、生徒会と話しあうことも多いだろう。昨日や今日のように二人でどこかにいくことも増えるかもしれない。凧もずっと会長と呼び続けるのは少し辛い。行く先には局長や組合長、なんなら会長という立場の人もいるだろう。紛らわしすぎる。凧は牡丹からの申し出を受けることにした。

「は、はい。牡丹、さん。」

今まで人の名前を呼ぶことが少なかつた凧には少し恥ずかしく、顔が赤くなつてしまつていた。決して百合的なものではない。長期のコミュ障の結果だ。

「はい。凧さん。」

牡丹の期限が少しよくなつていた。生徒会でずっと会長と呼ばれ続けるのが少し飽きていたのかもしれない。ちょっと新鮮だつたようで、顔が少し赤い。やはり側から見ると百合カップルにしか見えないような構図だた。だから大事なことなのでもう一度決して百合的なものではない。

◇ ◇ ◇

上陸船から降りると、近くの砂浜に陸上自衛隊から買い取ったのか軍事用らしいが停まつていた。武装は取り外してあつたが、どうみても戦闘用のヘリコプターであるという風格は残つていた。

「ほら行きますよ、凧さん。」

そう言つて牡丹が手を引いてくる。手を引かれた先はそのヘリコプターだつた。
「来ましたな。離陸準備に入つてくれ。」

と七郎が操縦手に司令を出す。

ヘリコプターの中にいたのは蝶野一尉もいた。
「どうしたんですか、このヘリコプター。」
気になつたので聞いてみる。

「ああ、これのことか。これはAH—1Sと言つてね、自衛隊が後継機に切り替える時に
スクラップにする予定だつたから買い取つたんだよ。戦闘用だけあつて機動性が良くな
て重宝してゐるんだよ。」

なるほど。ヘリコプターは旧機体だつたようだ。だが凧にはどうでもいいことだつ
た。ただ、ヘリコプターに乗つたことのない凧にはいきなり旧機体のヘリコプターとい
うのは不安だつた。隣にいる牡丹は平然としている。生徒会長の余裕なのだろうか。
「あの、これ本当に飛ぶんですか。後継機に切り替える時のものつて。」

日本の自衛隊事情をよく知らない凧からすれば古い機体というのは不安だつた。
「大丈夫だよ。日本の機体だからね。確か八十年代に作られた試作車がまだまだ動くと
いう話も聞いたことがあるからねえ。古さと故障は結び付かんよ。」

試作車ということは車、もしくは戦車。八十年代ということは九〇式戦車の試作車両であるSTC-1のことだろうか。戦車とヘリでは少し違うような気もしたが、少し安心できた。

「では飛んでくれ。」

「はい。行きますよ。」

と操縦手から返事が返ってきたと思った瞬間、期待がふわっと浮いた。飛行機にすら乗つたことのない凧にはとても不思議な感覚だつた。状況としては乗り物が変わつただけであまり変わらないかも知れないが、速度の速いエレベーターが動き出したと表現するのが一番近いかも知れない。

飛行はとても安定していた。七郎の言う通りしつかり動く機体のようだ。

そのまま順調に移動し、文科省にたどり着いたのは九時半だつた。

今から文科省の話し合いだと思うと、また緊張してきた。こんなに緊張したことは今までないかも知れない。

凧達四人は丁重に通され、局長室前まで案内された。牡丹が扉をコンコンとノックした。

「川跡学園高校生徒会長の鎌田牡丹です。」

「同じく川跡学園高校二年生の天馬凧です。」

「どうぞ。入ってください。」

扉をキイッと開けた。これからついに文科省との話し合いがは時まる。

「案外上手くいきましたね！」

「案外上手くいきましたね！」

「失礼します。」

局長室には文部科学省学園艦教育局の局長である辻局長がいた。その周りには局長用デスクとテーブル。そして二つのソファがあつた。

「どうぞそちらのソファにお座り下さい。」

そう局長が言つたので座る。

そこまではいいのだが、何か局長の様子がおかしい。少し落ち込んでいる。いや、悩んでいる感じだつた。何かあつたのだろうか。もしかすれば大洗女子学園絡みかもしれない。廃校予定だつた学校が日本戦車道大会で優勝してしまつたのだ。学園艦教育局の局長の責任が問われるのは当たり前のことだ。辻局長が大洗女子学園に優勝すれば廃校を撤回すると言つてしまつた責任は大きい。お役所仕事のことだ。書類にサンと印鑑がないものは踏み倒してしまえなどと命令でもされているのだろうか。もしそうならマスコミは辻局長を責める形で報道するだろう。辻局長が悩むのも納得でき

る。

そんな今の凧にはどうでもいいことを考えていると、辻局長が発言する。

「今日は私立川跡学園高校の戦車道に関してでしたね。」

「はい。」

と牡丹が答える。今日は戦車道連盟の会長も来ているが、基本的には私立川跡学園高校の問題だ。牡丹が答えられることに関しては牡丹に任せられている。つまり凧がすべきことは何もない。

「戦車道連盟に確認は取つたんだろう。何の問題があるのかね。」

確かにそうだ。ただ戦車道をするだけなら日本戦車道連盟に確認を取つた時点で何の問題もない。

「はい。戦車道をするだけならば何の問題もありません。しかし、我々はいつかは日本

戦車道大会に出場したいと考えています。大会は文部科学省も絡んでいますよね。」

「だが貴方のところの戦車道は同好会でしょう。選択科目で受講している学校には敵わないのではないですか。」

「それはやつてみないとわかりません。ですが今確認を取つておかなければ武装を買い替えなければならない可能性が出てきますから。」

「それでも部活動ならともかく同好会では。」

「お言葉ですが同好会でも出場している大会は多くあります。戦車道大会だけ別という
のは不公平ではないでしようか。」

「そうとも言えなくもないが。戦車道は必要な予算が桁違いだろう。やはり予算面に差
が出る同好会を大会に出すというのは。」

「その点については大丈夫です。我が校の戦車はお金がかからないですから。」

「お金がかからない戦車とはどういうことなんですか。」

「はい。偵察用の軽戦車のような代物ですが。」

「は。偵察車両ですか。聞いていませんよ。」

「言つてなかつたんですか。七郎さん。」

急に話を振られて七郎が一瞬焦つた後の発言する。
「そういえば私立川跡学園高校の戦車道同好会に関してとしか伝えておりませんでした
な。」

局長の表情が少し呆れたようなものに変わる。

「すみません。ええと、鎌田牡丹さん、でしたかな。ここからは日本戦車道連盟の会長と
話をさせていただきたいのですが。」

「そうですね。わかりました。こちらも車両のことは伝わっていると思つていたので
そつちの方があります。」

「そうですか。では児玉会長。偵察用車両での戦車道を認めたんですか。」

「そうだが、別にいいんじゃないか。装甲が薄いのはカーボンさえ付けていれば乗員は安全ですかね。」

「装甲の面はわかりました。では火力面はどうなのだ。偵察車両の火力で他の戦車の相手ができるんですか。」

「そんなもののアンツィオ高校と比べれば何の問題もないでしょう。偵察用車両ということで我々は対戦者ライフルを使えばいい。それで火力が足りないならばRPGのようなものを使えば問題ないだろう。」

「そういうことでしたら細かい武装のルール調整は日本戦車道連盟に任せますが、そもそも偵察用車両を戦車と認めてもいいんですか。」

「全周装甲で履帯まであるんだから戦車でしよう。」

「そうですか。とりあえず偵察用でも戦車であるということは認めましょ。ですがそれと同好会に大会出場資格を与えることは別問題です。」

「出場資格と言つてますけれど同好会は参加してはいけないなんて規則ないですよね。ただ前例がないということで確認に来たんですよ。勝手に新しいルールを作らないでもらえますかね。」

「うつ。わかりました。ですが条件があります。大会に出るまでにある程度の実績を

作つておいてください。有力校がいつの間にか定めていた不文律があるですからね。大洗女子学園が大会に出場した時もいろいろあつたんですから。面倒を増やさないで下さいよ。」

「それは。善処します。」

どうやら辻局長には周りからの圧力がかかっているようだ。戦車道のようなお金がいる競技は戦車が買う為の初期投資が必要のため、どうしてもお金のある高校の力が強くなってしまう。戦車道の問題点の一つだ。

そのように細かい交渉が続き、日本戦車道大会に出場するためにはある程度の実績を作つておく必要があるという点以外は大方上手くいった。

◇ ◇ ◇

文部科学省の外に出ると、既に夕方になつていた。いいことがあつた直後に見る夕日はとても幻想的に感じる。

だが、凪の心は曇っていた。凪は何もできなかつたからだ。確かに今日の話し合いに凪が入つてもできることは何もなかつた。凪には川跡学園高校を動かす権限もないし、日本戦車道連盟で発言力があるわけでもない。凪が付いてきた理由も当事者だというのしかない。だが凪はそれが悔しかつた。自分のことなのに何もできない。その無力さがとても悔しかつた。

もし凪の戦車道同好会が大会で良い成績を残すような同好会なら今日の話し合いにも混ざっていただろう。その予想が凪の戦車道大会への思いを大きく変えた。ただ戦車道をするだけではダメだ。実績を残さないと何にもならない、と。

「案外上手くいきましたな。」

そう七郎が言う。

「そうですね。こんなに私達に有利に進むとは思っていませんでした。」

牡丹がそう答えると、七郎が笑う。どうやら牡丹の発言に何かおかしいことがあつたらしい。

「笑つてすまんかったねえ。いやいや、初めからこうなる事は決まつていたんだよ。向こうには武器にできるルールが何一つないからねえ。その証拠に予算がないということとしか言われなかつただろう。」

確かにそうだ。辻局長は同好会で選択科目受講者に敵うかというところばかり指摘してきていた。今考えると反論が思い浮かばなく無理矢理作つた言い訳だつたのだろう。

牡丹と七郎が用意してくれた戦車道をする条件。それを無駄にしてはいけないと凪は強く思つた。

来年の大会までに戦車道の実績を残す。その為には一刻も早く練習試合を取り付け

なければならぬ。その為に必要なのは武装だ。凪は家に帰るとインターネットで
クーゲルパンツァーでも使える武装が買える場所を探し始めた。

＼戦車道ショップです！＼

＼戦車道ショップです！＼

インターネットで対戦車ライフルについて調べていると、戦車道競技の画像が目に付いた。戦車道競技のルールである10トン以下の戦車相手にはとても有効な為、改造して付けられているようだつた。

ということは戦車道競技の為の部品がどこで買えるのかを調べれば良い。凧は戦車道競技用の部品を取り扱っている店の情報を探した。だがいくら探しても見つけることができなかつた。どうやら表層ウェブに戦車道競技の情報は無いようだ。普通のソフトで見つけられない情報を見つける手段。それば一つしかない。Torブラウザだ。アメリカ軍が開発したIPアドレスを隠してインターネットにアクセスする手段である。いくつかのパソコンを経由して一枚ずつ暗号化したり、解読したりする為、少々重くなるのがネックだが、裏の取引をしたり、よくないとされる情報を調べたりするにはもつてこいな代物だ。凧にはそんな知識がある程度あつた。長年一人で写真を撮り、パソコンを使いネットで生きていたおかげだ。

Torブラウザを使うと案外すぐに戦車道競技の部品ショップ一覧を見つけることができた。表層ウェブに情報がないのはどうやら戦車道競技が野蛮なものと位置付けられている為、世間の目につかないようにする措置らしい。

一覧によると、どうやら戦車道ショップの地下に戦車道競技ショップが併設されているらしい。戦車道ショップの店員ではなく、店長に戦車道競技の部品が欲しいと言えば連れて行つてもらえるらしい。間違つて入つてしまふ人もいるのではないかとも思つたが、Torブラウザを使つていてる人がそんなにいるわけがない。いつ行こうかとカレンダーを見ると、今週末の金曜日に終業式と書かれていた。気にもとめていなかつたが、どうやら今週末から夏休みらしい。終業式の日は基本的に午前中で終わるので、金曜日に戦車道ショップへ行くことにした。



終業式が終わり、ホームルームで成績を配られると、成績になど見向きもせずに凧は戦車道ショップへと向かつた。

私立川跡学園高校の戦車道ショップは狭かつた。この学園艦内で戦車道をしている人といえば最近ゲートボールの代わりにと始めた老人会くらいしかいないという事を踏まえると当たり前のことだ。だが、狭いと言つても商品はある程度充実していた。商品のほとんどはアメリカ戦車、ドイツ戦車、ソヴィエト戦車とメジャーナものだつだが、

念の為かイギリス戦車や日本戦車、フランス戦車などマイナーなものも置いてあつた。

その狭い店内で店長を見つけることは容易だつた。中々に良い体格をしたその男は、容姿に見合わず鼻歌を歌いながら店内の掃除をしていた。

店長は掃除がひと段落でもしたのかふと顔を上げると、こちらに気付いて話しかけてきた。

「いらっしゃいお嬢ちゃん。あの婆さん達のお使いかな。今日はどんな部品をお探しなんだい。大きな部品となると在庫は少ないが転輪の予備とかならいくらでもいけるぜ。」

どうやら凧のことを老人会のお使いだと勘違いしたらしい。それも仕方ないことだろう。先にも述べた通りこの学園艦内で戦車道の部品を買いに来る人なんてそれくらいしかいないのだから。

「いえ、私は老人会のお使いとかではなくて。あの、サイトを見てきました。戦車道競技用の部品を買いたいんです。」

店長の目が一瞬にして真剣な目に変わつた。

「そうか。で、何が欲しいんだい。いや、地下へ案内する方が先か。着いてきな。」

先導する店長に着いて行くと、戦車道ショップのバックヤードに金属製の無骨なエレベーターが現れた。移動することしか考えられていない昔のエレベーターのイメージ

に似ているかもしれない。

そのエレベーターで戦車道ショップの地下へ降りると、とても広大な空間が広がっていた。どうやら近隣の民家の地下室より深く掘ることでスペースを確保しているらしい。その為、崩れないよう太いコンクリート製の何本もの柱で支えられていた。

「ここ」がうちのタンカスロン用部品売り場だ。売り物はそこまで多い方ではないが、中身にか期待して貰つてもいいぜ。」

店長がドヤ顔をして話してくる。売り場を一通り自慢し終わると、ハツとした顔をして聞いてきた。

「で、今日はあんた何の部品を買いに来たんだい。」

とても真面目な声だった。自慢していた声とは全く違う声に少し戸惑つたが、気を取り直して答える。

「今日は対戦車ライフルを探しに来たんです。」

「対戦車ライフルだつて。使つてる戦車の改造かな。それなら砲塔外に付けられるリモート操作のものがいいかな。」

「いえ、主武装です。ついでに言うとタンカスロン用でもありません。戦車道用です。」
店長が驚いたような顔をする。そもそもどうだろう。対戦車ライフルを主武装に、しかも戦車道で使う人なんて殆どいない。

「戦車道で対戦車ライフルか。戦車道は搭載予定だった武装しか使えないから積んで行つても使えないぜ。」

「それについては大丈夫です。戦車道連盟並びに文科省から認可を得ています。」

店長は慣れたのか、今度は驚かなかつた。

「そうか。ということは、中戦車や重戦車でも相手できる物じやないといけないな。いや、中戦車は対戦車でも相手可能かもしけないが、重戦車はきついぞ。対戦車ライフルの両分じやない。」

対戦車ライフルとは歩兵が持ち運びができるように開発された対戦車兵器である。迫撃砲や高射砲ではない小口径のものの為、重戦車の相手ができないのは当たり前のことだ。

「そうですか。ならば重戦車でも相手可能な兵器はありますか。」

店長は少し考えたあ後、凧が戦車道に持ち込める兵器の範囲を確認すると、また考え出した。

しばらく考え込むと、店長は喋り出した。

「対重戦車ができる歩兵携帯用の対戦中兵器か。一応あるぞ。だが在庫はない。数週間か1ヶ月はかかるかもしれないが仕入れておいてやる。あ、対戦車ライフルの方は任せとけ。ちようどいいのがある。」

そう言うと、店長は商品の山を漁り出した。

「そ、うそ、うこ、れだ。カールグスタフ P V g m / 42。スウェーデンで開発された対戦車ライフルだ。いや、厳密にいえば無反動砲と同じ方式を採用したが便宜上対戦車ライフルと呼ばれるようになつたものだ。S 1 P P r j m / 42 つていう弾薬で 100 メートル離れたところから均質圧延鋼装甲で 40 ミリメートル貫徹する対戦車ライフルの中ではピカイチの性能だ。軽戦車なら正面からでも楽勝に打ち抜けるし、中戦車相手でも物によれば正面から貫徹できると思うぜ。重戦車なら側面でも厳しいかもしけんが。まあ戦車が使われ出した初期に頃の戦車の砲と同じくらいの貫徹力だな。最低でもあるの大洗が使つてた八九式中戦車よりも貫徹力があることは断言できるぜ。それに弾丸初速がとても速いんだ。秒速 950 メートルで発射するから弾丸があまり垂れないし風にもあまり流されない。そこらの戦車砲よりも断然扱いやすい。だが弱点がないわけじやない。いくら初速が速くて遠距離で当てやすくつたつて有効射程が 300 メートルしかないんだ。つまり近距離戦しかできない。遠距離戦に持ち込まれたらこつちは手出しできなくなるんだ。でもこれ以上の対戦車ライフルとなると戦後になつちまうからなあ。」

有効射程が短い。それは忍び寄つて撃つ歩兵なら苦にならない欠点だが、こちらも大きい戦車戦では致命的と言つていい。なんせこちらのクーゲルパンツァーの装甲は 5

ミリメートルしかない。相手は射程内ならどれだけ遠くから撃つたとしても貫徹できるだろう。それに加え店長の言っていた対重戦車用の歩兵携帯兵器となれば遠距離はまず無理だろう。つまり凧に遠距離戦をするという選択肢はない。確かに遠距離戦ができないのは致命的ではあるが、凧の環境ではそこまで問題にはならなかつた。

「いえ、大丈夫です。私なんかが狙撃してもそもそも当たらないでしようし。それに近距離でしつかり狙つたところに飛んでいく。そんな初速の速さの方が重要だと思います。」

「そうか。そうだな。嬢ちゃんの言う通りかもしだれん。よし。今回は特別に本体料金を半額にしてやろう。これから弾薬を買いに来てくれる客ができたんだしな。あ、でも弾代はしつかり全額もらうからな。とりあえず今回は本体と練習用弾薬だけでいいか。試合用弾薬は湿度にやられたら使えなくなるし、試合ん時に買いに来るのがいいと思うが。この店の売り場はその点ちゃんと湿度管理してあるからな。」

正直ありがたい。凧の使っている倉庫街の部室は湿度を調整する機材なんていいものはないからだ。

「はい。お願ひします。ではとりあえず二週間分ほどの弾薬をいただけますか。」

そう言つて牡丹から事前に受け取つておいた戦車道同好会の部費からエンジンの修理回収の予算を抜いたものを渡す。

「ほう。これが同好会の部費があ。国からの補助金があるとはいえないなかあるんもんだな。」

「いえ、戦車道は弾薬という消耗品があるので他の同好会よりは多く予算をもらえました。もしかしたら人数が少なめの部よりかは予算が出ているかもしません。」

店長は少し考えると納得したようで、すぐに話を戻した。

「そうか。これで一年間だよな。なら対重戦車用の兵器はちょっとばかしいものを仕入れられるとと思うぞ。ただし、このカールグスタッフ p v g m / 42 の本体を壊さなければ、だけどな。あ、二週間分の弾薬だが、後でトラックで本体と一緒に運んでおくよ。学園の倉庫街だったつけ。とりあえず千五百発くらいかな。ちゃんと撃つだけじゃなくて着弾場所確認を挟むんだぞ。そうしないと上達が遅い上に弾薬もたくさん使用しちまうからな。」

「はい。本当にありがとうございます。では私は駆動系を依頼したバイク屋さんに行かなくてはなりませんので。」

「そうか。じゃあな、嬢ちゃん。頑張れよ。」

「はい。」

そう言つて凧はバイク屋に向かつた。

♪練習です!♪

♪練習です!♪

凪はバイク屋から運ばれてきたクーゲルパンツァーの後部ハッチをキイツと開けた。バイク屋に預ける前に試しに開けてみた時よりも断然静かになっている。油をさしてくれているようだ。

ハッチの中を見ると、操縦に使う二本のレバーと、変速に使うレバーが一本あつた。各レバーは、先端は握るためのグリップになつていて、その少し下に、踏んで操作する用の板が取り付けてあり、ペダルとしても使えるようにしてあつた。各レバーの根本には金具でバネを付けることが出来るようになつてている。その為、スイッチ一つで足での操作と手での操作を切り替えることができる。つまり、手で操作する時は他の戦車と変わらない操作方法で、足で操作する時は踏むとレバーが前へ、力を抜くとバネでレバーが元の位置に戻るようになつっていた。その為足での操作に切り替えれば手が空くので、走りながらでも射撃できるようになつていた。

クーゲルパンツァーを試しに走らせようとレバーを前に倒すと、凪は背もたれに叩き

つけられた。バイク屋の店主がルール違反にならない程度に強化してあると言つていたので少し身構えてはいたのだが、それの比ではなかつた。戦車道のルールは搭載予定だつた部品である。だが、クーゲルパンツァーの資料はほとんどない。つまり、分かっている範囲の事にのみ従えば良い。そしてクーゲルパンツァーのエンジンについて分かつてゐることは、原付バイクのエンジンと同じ気筒数で、同じ方式であるということだけである。つまり、原付バイクと同じ気筒数、方式であれば問題ないということだ。その結果、元は最高速度 8 km/h だつたものが、巡回 20 km/h 、戦闘速度は 30 km/h で、数秒程度の短時間ならば 40 km/h を出せるようになつてた。つまり最高速度が五倍にもなつっていた。

凪は一通り倉庫街の周辺を走らせると、カールグスタフ p v g m / 42 を積んで牡丹が作つてくれた射撃演習場に向かつた。

射撃演習場は、短期間で作つたとは思えない程見事なものだつた。ちゃんと距離ごとにマーカーがついており、いちいち測距儀を使わなくても的までの正確な距離が盛るようになつていた。

初めての射撃なのでまずは 30 メートル 離れたところにクーゲルパンツァーを止め、車体正面の穴から銃身を出す。穴は、スコープで狙えるようにする為にバイク屋の店主が広げてくれていた。銃を構え、スコープを覗くと、的がとても大きく見えた。対戦車

ライフルは遠くからでも確実に相手の弱点に命中させる必要があるので、スナイパーライフルと同じ程の倍率のスコープが付いていた。

スコープの十字線に的の中心を合わせて引き金を引くと、弾丸はほぼ垂れる事なく的に着弾した。スコープが銃身の上に付いている分の若干の誤差はあるが、スコープ付き、単発撃ちの銃で30メートルというのは近すぎるという事だ。

その為、凪は一気に距離を離し、100メートルに変えた。100メートルというと、一般的な徒競走の距離である。その距離から見る的には、十分に小さく見えていた。初心者が練習として静止した状態で撃つにはちょうど良い距離のように思える。実際試しに撃つてみると的に当たりはしたが少し逸れてしまつた。これは今の射撃が弱点を正確に狙撃しなくてはならない相手へのものだつた場合、撃破できないとということを意味する。それに加え本番なら相手が動いている事の方が多い。静止している的にすら当てられないのでは困るのである。

しかし、実戦を想定するならば戦車戦での100メートルはまだ近距離の部類に入る。的を見ると小さく思えるが、それは弱点を狙いうつ事を想定した的だからであり、相手が大きい戦車ならば100メートル離れてても十分大きく見える。つまり装甲5mのこちらを狙う時、相手はどこに当ても撃破できる為、100メートルでは遠距離のうちに入らず、対戦車ライフルで何処を撃つても撃破できる相手でない限り凪は常に

不利であるということだ。それでもこのカールグスタフ p v g m / 42 以上の対戦車ライフルはほぼない。戦車道ショップの店長が対重戦車用の兵器を仕入れられればもう少し戦いやすくなるかも知れない。だが課外活動で試合をするならば、公欠で休めたとしても長引く可能性がある為望ましくない。フラッグ戦は別だが、殲滅戦ならそもそも制限時間がないからだ。その為長期休暇に試合をする学校が多い為だ。つまり夏休みは始まつたばかりだが、練習で使い切ってしまう訳にはいかないし、対重戦車兵器が届くのを待っている暇もないということだ。

凪は猛練習を始めた。それでもただ撃ちまくるということはせずに、しつかり弾着確認をして微調整を繰り返していった。幸い操縦関係は変速レバーの動かし方さえ覚えれば後は感覚で操縦しても問題なかつた。まだまだ練習する部分はあるのだろうが、後回しにしても問題ないレベルだ。

ある程度練習して静止状態からの射撃の命中率が 100 メートルで八割を超えると練習を切り上げ、行進間射撃の練習に移つた。クーゲルパンツァーの後部ハッチを開け、足での操縦に切り替え、ハッチから身を乗り出す。静止射撃ならば狙撃することが前提なので、車体全面の穴から射撃していくが、行進間射撃となるとクーゲルパンツァーが追いかけながら撃つという状況は考えづらい為正面への射撃を練習してもほぼ意味はない。凪が行進間射撃をするとしたら格闘戦中か、もしくは撤退中だからだ。

行進間射撃は思いの外簡単だった。走りながら姿勢を維持する体幹が必要だが、操縦の為にレバーを踏み踏ん張つてゐる為あまり苦ではない。それに加えて、通常の戦車なら砲が車体に固定されているのに対し、固定されていない為車体の揺れの影響を受けにくい。それに加えターレットリングを使わず体を捻るだけの為、砲旋回速度が制限されない。これは、格闘戦ならば凧が有利だということを意味する。もし、相手に気付かれずに格闘戦ができる距離まで近づけば凧が有利だということだ。まあそもそもその距離まで近づくことが難しいのだが。だが遠距離で戦うことが不利であり、格闘戦の方が凧に都合がいいということは分かりきったことである為、極めるならば格闘戦だ。

それから凧は行進間射撃の練習をしまくつた。だが、あくまで相手は動かない目標相手だ。偏差は凧が動かしているクーゲルパンツァーの速度を維持しようとする力が働いてくれる分だけだ。着弾までに相手が動くことは想定していない。だが偏差射撃で難しいのは相手の動きに合わせることだ。

そこで凧はオンラインの戦争ゲームを始めたことにした。あの大洗のアリクイチームに見習う事にしたのだ。大洗女子学園のアリクイさんチームは戦車で戦うゲームで知り合つたゲーム仲間だつたという。だが、アリクイさんチームの3人がしていきたゲームを調べると、画面に走行すると大きくなり停車すると小さくなる円が表示され、その円の中に乱数で着弾するというもので、ゲームとして最適化されていた。それでは

照準の練習にはならない。なので凪は他のゲームを探すと、すぐに別のゲームの名前が出てきた。そのゲームは、砲制度による着弾場所の乱数はあるものの、ある程度なら腕でカバーできるリアルに寄せたゲームだった。設定を変えれば照準器のカメラの位置が変わり、砲と照準器の位置関係からくるこれまで再現されていた。

凪はそのゲームをダウンロードすると、練習の合間にプレイし始めた。もしかすると初めから使える戦車は短砲身で砲弾の垂れが大きいかとも思ったが、機関砲搭載車がすぐくに使えたので現状の凪と戦車の種類は違うものの似たような状況を再現できたのでさほど問題はなかった。



約2週間が経つた。凪の射撃の腕はある程度上達し、行進間射撃でも停止している目標相手なら八割型命中するようになっていた。一人では練習できない戦闘での立ち回りも、ドクトリンという程のものではないが、自己流の動き方ができ始めていた。凪は射撃練習をやめてカールグスタフ p v g m / 42 を置くと一度深呼吸をし、決心した。今日までもう少し上手くなつてからと後回しにしてきたがそろそろ始めなくてはならない。練習試合だ。そろそろ対戦相手を探し始めないと本当にまずい。凪は家に帰つたら相手校を本格的に探し始める事にした。

初めての試合です!

「試合を申し込みます!」

「試合を申し込みます!」

家に着いた凧は、戦車道を実施している学校のリストを作っていた。難しいものだ。インターネットで戦車道実施校と調べても、有名校ばかりがヒットして無名校なんてなかなか出てこない。サンダース高校に関しては、二軍や三軍などにも公式サイトがあり、画面を圧迫してくる。それに加え、大洗女子学園の優勝から時間がたっていないから、一ページ目は全て大洗女子学園関連のまとめサイトが占めていた。この状態は凧からすれば不幸だが、戦車道を始めるきっかけを凧にくれたのも紛れもない大洗女子学園だ。大洗女子学園の優勝がなければ、凧はそもそも戦車道に興味すら示さなかつただろう。

そのようななたわいのないことを考えながら検索結果のページを進めていくと、ある学校のサイトが凧の目に止まつた。

椿原高校という名のその高校は、創始者が日本人であり、他国の干渉を一切受けるこ

となくやつてきている学校のようだつた。戦車道のページは、部活欄にあつた。戦車は日本戦車を使い、私立川跡学園高校と同じで課外活動扱いになつてゐるようだ。

戦車道を授業として実施してゐる学校からすれば練習試合対象としてリストに加えさえされない。だが凪からすればとても都合の良い相手だ。

凪は早速椿原学園に電話してみる事にした。

電話をかけると、生徒会に繋がつた。どうやら椿原学園でも生徒会が実権を握つてゐるらしい。戦車道部の責任者を尋ねると、やはりというべきか部長に繋げられた。

「はいもしもし。お電話変わりました。椿原学園戦車道部部長の桑智柑奈です。」

戦車道の隊長ということで、西住まほのような雰囲気の人が出てくるかと少し身構えていたが、とても優しい声だつた。

「私立川跡学園高校戦車道同好会会长の天馬凪です。本日は突然のお電話すみません。」

戦車道の試合となれば、学園艦が動くのだ。そんな大きなことを決める電話を突然かけるというのは非常識だろう。まだ戦車道の事で電話をしたとわ言つていなが、いやそもそも突然電話をかけたことに軽く謝罪するのは当然のことだろう。

「いえいえ、大丈夫ですよ。今日はどのような御用件でしようか。」

「今日は戦車道の練習試合を申し込めないかと思い電話させていただきました。」

「そうでしたか。失礼ですが、私立川跡学園高校という学校は聞いたことがないのです

が。」

当たり前だろう。私立川跡学園高校はまだ一回も試合をしていない。なんの特色もない学校の名前を知っている人の方が珍しいだろう。

「はい。我が同好会は今年発足したばかりの同好会でして。」

「そうでしたか。試合となれば学園艦が動く事になるので少々待つていただけませんか。今部員に生徒会室へ学園艦の予定を確認させに行きますので。」

「はい。お願ひします。」

ちなみに凧の方は既に牡丹へ連絡してある。夏休み中に寄港してほしい港を募集したが、特に希望がなかつたので凧の好きにして良いという事だつた。

しばらく待つと、電話の向こうから息を切らせた音が聞こえてきた。どうやら生徒会室まで走つて行つて帰つてきたらしい。別にそんなに急いでもらわなくともよかつたのだが、いちいち口を挟むことでもないだろう。

「今確認が取れました。今週末の日曜日なら大丈夫ということでしたが、そちらは大丈夫ですか。」

カレンダーを見ると、現在は夏休み三週間目の水曜日。三日も準備期間があれば問題ないだろう。

「来週末ですね。大丈夫です。で、ここからが大事なんですが、試合場所と試合形式はどう

うしましよう。」

試合場所。厭はどこにどんな地形の場所があるなどることはほとんど知らない。

学園艦の学校が建設され始めてから、生徒の家族や商店など多くの人が学園艦に移り住んだ。その時に空いた土地にたくさんの戦車道用の地形が作られた。実際の市街地を使うこともなくはないが、多くの試合で廃村や廃街が使われるのはその為だ。

その為使いたいと連絡すればそれだけでいい話なのだろうが、できることなら使つたことのある人から予約しておきたい。

「そうですね。そちらはできたばかりの同好会ということでしたので、私の方から予約しておきましよう。どのような地形が良いなど何か希望はありますか。」

「いえ、特にありません。というより試合をしたことがないのでどのような地形が良いのかわからないので。」

「そうでしたね。では、できるだけ初心者にも優しそうな地形にしておきます。次に試合形式でしたか。こちらは五両の戦車を保有していますが、そちらはどうでしょうか。」「こちらの戦車は一両です。ですが、日本戦車が相手ならば別に大きな問題はないと思います。」

日本戦車は装甲が薄いことで有名だ。日本戦車で装甲の厚い車両など、終戦直前に計画されていた自走砲であるホリ車くらいしかないが、そのホリ車は終戦によつて試作車

の完成直前に製作が中止された為、戦車道で使うことはできない。その為凧のカールグ
スタッフ P v g m / 4 2 でも問題なく相手可能と判断した。

「そうですか。こちらは部員の練習の為に五両全てを出ししたいのですが。」

「はい、わかりました。そういうことなら、フラッグ車とその護衛はどうしても戦い辛い
フラッグ戦ではなく、殲滅戦の方がいいですね。」

率直に言うと、凧は相手を舐めていた。マズルフラッシュも発砲音もほとんどない凧
のカールグスタッフ P v g m / 4 2 なら日本戦車を五両なら同時に来ても射程に
入った瞬間から正面を撃てば問題ないと考えていた。

「いいんですか。そちらは一両でしよう。いえ、フラッグ戦だったとしてもそちらはフ
ラッグ車を待機させておけないのでしたね。それなら全車向かつて行つた方がやりや
すいということですか。ではお言葉に甘えて殲滅戦でお願いします。」

凧と柑奈は観戦者収容数、予算や新聞社の人をどれほど招くかなど細かいことを相談
し、試合会場が決まれば凧ではなく私立川跡学園高校の生徒会の方に連絡するというこ
とで、電話を切つた。

相手の情報収集と試合用弾丸など準備を三日でしなければならない。凧は牡丹に相
手校とそのうち試合場所の連絡が来ることを伝え、牡丹の好意で生徒会に情報収集を任
せると、準備に取り掛かった。

（）弾薬の用意をします！（）

（）弾薬の用意をします！（）

凪は戦車道ショッピングに向かっていた。試合用弾薬を買う為だ。急に試合用弾薬を買に行くのは店長に悪いかとも思つたが、練習用弾薬を買った時には用意できているような雰囲気だったので連絡はしなかつた。

店につき入ると、普段は客がいなくて暇そうな店にも関わらず店長が忙しそうに働いていた。

「何かあつたんですか。」

珍しい事だつたので聞いてみると意外な答が返つてきた。

「ああ、お嬢ちゃんか。そういうやそろあれから2週間経つ頃だつたな。ええと、この店が何でこんなに忙しくしてゐかつて事なら氣にするな。ちと対重戦車用の武装の仕入れに手こずつててな。頼れそうな所を見つけてはそこの手伝いをしてるだけだ。」

凪の為だつた。

「そこまでしてくれなくても。こんな見ず知らずの学生なんかの為に。」

対重戦車用の武装が欲しいと言つたのは凧のはずなのだが、店長の疲れたような姿を見るところ言わずにはいられなかつた。凧が他の客と違う部分といえばTorブラウザを使いホームページを見たかどうかというくらいだ。だが、インターネットの表層ウェブにも表のホームページはある。ただ使つているソフトが違つたというだけだ。それではここまで手間をかけてくれる理由にならない。凧はそう考えていた。

「見ず知らずの学生なんかじやねえ。」

今まで聞いたことのないような物凄い勢いだつた。

「俺も嬢ちゃんがただの女子高生だつたらここまでしてねえよ。というよりお前がただの女子高生ならカールグスタフ P v g m / 42 の本体を半額になんてしてねえ。お前はただの女子高生じやなくてこの学園艦内で久しぶりに現れた戦車道をしてくれる女子高生なんだよ。お前も知つてるかもしかしながら、学校が戦車道をしなくなつてからこの学園艦で戦車道をしてるのなんてずつと老人会くらいいのもんだつた。この店はずつと暇で前の店長の時からあつた在庫を売るだけで仕入れすることなんて1回もなかつた。そんな時に来たのがお前だつたんだよ。最初は大洗女子学園のテレビ中継を見てただ実物を見てみたいだけの奴かと思つた。でも違つただろ。お前はこの店に戦車道をする為のものを買いに来ててくれたんだ。そのお陰で俺にも初めて仕入れをする時がやつてきた。この機会を作つてくれたお前が俺にとつてただの女子高生なんて事ある

訳ねえじやねえか。」

勢い良く喋っていたせいで少し脈絡がぐしゃぐしゃではあつたが、言いたいことだけはひしひしと伝わって来た。

「でも、私にとつては戦車道をする為のただの通り道で。それでも私が通つたせいで道がボロボロになるのは見たくありません。これじや私が踏み台にしたみたいじやないですか。」

店長はハツとしたような顔をし、少しさると落ち着いた声で喋り出した。

「そうだな。そんなこたあ初めから分かつちやあいるんだよ。これは嬢ちゃんの為じやなく、老人以外の初めての客に入れ込みたいつてだけの自己満足だ。1客の為に無理する姿を見て相手がどう思うかなんて気にしちゃあいなかつた。嬢ちゃん、すまんな。」

「いえいえ、心苦しくはありましたけど私の為にここまでしてくれるのは嬉しかつたです。」

店長はホツとした顔をすると気を取り直して話を変えた。

「で、今日は練習用弾薬の補充に来たんだな。」

「いえ、違います。今日は試合用弾薬を買いに来たんです。」

「そうか。お嬢ちゃんも遂に試合か。弾薬は前運んだ倉庫でいいのかな。後で運んでおくよ。ところで、相手は何処なんだい。」

「椿原学園つて所です。どの国の影響も受けていない純粹な日本の学校みたいですよ。あ、弾薬は前回と同じでお願ひします。」

店長はしばらく椿原学園という学校名を脳内で検索した後に、少し申し訳なさそうな顔をして言つた。

「すまんな。知らんわ。そんな学校があつたんだな。純粹な日本の学校はてつきり知波単学園くらいのものだと思つとつた。相手は何を出してくるんだ。日本戦車だつて舐めてかかつたらえらい目に遭うぞ。」

「それは今学校の生徒会に調べて貰つています。あと日本戦車つて装甲が薄くて火力もそんなにない弱い戦車じやないんですか。」

凧は戦車道を始めたばかりで仕方ないといえば仕方ないのだが、店長は少し呆れた顔をして解説し出した。

「日本戦車が雑魚だつてのは有名な話だがそれはちよつと正確じやねえな。日本戦車が弱いのは新しい戦車を開発しても前線に大きな影響を与える程生産できてなかつたつてだけだ。知波単学園が使つてるあのチハつて戦車あるだろ。あれの正式名称は九七式中戦車つてんだが、名前の通り皇暦2597年に暫定的な新戦車として採用された戦車で、正式採用されたのは西暦で1938年だこの頃の日本の戦車の扱いは歩兵を支援する車輌であつて決して対戦車を見据えた物じやなかつた。この頃のチハは対歩兵で

力を発揮して旧日本陸軍の進軍速度をとても速いものにしたんだ。だが暫くすると相手ももちろん戦車を使つてくるから対戦車をする必要が出てくる。そして対戦車火力が必要になつて新砲塔チハ、つまりチハ改に変更されていつた。このチハとチハ改はな、終戦まで前線で戦い続けたんだ。後継の投入が厳しくてな。つまり日本の戦車が弱いってのは初期の頃の戦車を相手の戦車が強くなつてからも使い続けたからつて事だ。日本が終戦間際に開発していく結局終戦と共に開発中止された自走砲なんて前面装甲125ミリメートルな上に傾斜してゐるんだぞ。さらに砲は105ミリメートルで貫徹力は1000メートル離れていても150ミリメートルなんていう化け物つぶりだ。だから日本戦車だからつて舐めてかかっちゃいかんぞ。」

言葉が出なかつた。日本戦車は雑魚だと高を括つていたからだ。だがそれも仕方ない事だろう。大洗女子学園でも八九式中戦車のアヒルさんチームが撃破していたのはカルロヴエロー・チエくらいだつたし、三式中戦車のアリクイさんチームに至つては華麗な出落ちをかましていた。戦車道といえば今年の戦車道大会しか見ていない処には日本戦車の強さを見る機会が無かつたからだ。

考えが甘かつた。

日本戦車について少しでも調べていれば回避できる事だつた。だがまだ希望はある。椿原学園が初期の頃の日本戦車を使つてゐる可能性があるか

らだ。今はそれに賭けるしかない。

「すみません。私、生徒会室に行つてきます。そろそろ偵察から帰つてくる頃だと思うので。」

嵐はそれだけ言うと急いで店を出た。後ろから「おう、頑張りな」と声が聞こえたが、振り向かずにバイク屋に向かい、クーゲルパンツァーの整備を頼むと、急いで生徒会室に向かつた。

「作戦会議です！」

「作戦会議です！」

生徒会室に行くと牡丹と、黒髪でもじやもじや頭の生徒会女子役員が待っていた。言葉にするとあまり良い印象は受けないが、顔と合つていて意外に可愛かつた。

「凪さん。椿原学園から試合場所が来ましたよ。敵戦車もある程度調べ終わっています。」

試合場所も大切だが、凪にとつては敵戦車の方が大切だった為先に聞く。

「敵戦車は何だつたんですか？」

そう聞くと、牡丹ではなく偵察をしてくれていた役員が答えた。いちいち長いので余裕ができる名前を聞くまではモジヤ子とでも呼んでおこう。試合が終わつて余裕ができる頃には忘れ去つてそつだが。

「直接見に行く時間はなかつたのでインターネットを漁つて分かる範囲の事しか分からぬのですが、強敵のようです。授業で戦車道をしている学校には及びませんが、課外活動界隈ではなかなかの実力校だつたようです・編成は中戦車4両に自走砲1両で、そ

の内訳は二式砲戦車ホイが1両に四式中戦車チトが1両。五式中戦車チリが2両に三式砲戦車ホニ3が1両というものでした。」

モジヤ子は言い切つたという顔をしているが、どんな戦車なのか全く分からなかつた。

「すみません。その戦車がどんな戦車なのか全く分からないので説明してもらえませんか。」

「あ、はい。すみません。二式砲戦車ホイは日本の中戦車で形と大きさは知波单学園が使っているチハ改と殆ど変わりません。ただ、砲は強化されてるようで口径は7・5ミリメートル。二式穿甲榴弾という砲弾を使用していて装甲貫徹力は、クーゲルパンツァーからすれば関係ないですが90ミリメートルです。ただ、砲弾初速は350メートル毎秒と遅いので避けやすいですね。狙撃には向かない戦車なので接近戦にさえ注意していれば問題ないでしよう。」

ひと段落したのかモジヤ子が一旦喋るのを中断する。牡丹はいつの間にか居なくなっていたが、気にせず1番大切な事を聞く。

「で、装甲はどうなんでしょう。」

「あ、装甲ですね。ホイの装甲は50ミリメートルの部分と25ミリメートルの部分があります。天馬さんのカールグスタフ p v g m / 42では50ミリの部分は貫徹

できませんが正面からでも一応撃破はできるようです。他の戦車はチトとチリが75ミリメートル。これは正面から貫徹できる部分はなく、側面からないと撃破できません。ホニ3が25ミリメートルで正面の何処を撃つても貫徹できます。火力に関してはこちらの装甲を考えるとどの戦車の砲弾を受けても一発アウトということになります。砲弾初速はホニ、チト、チリの3両全て650メートル毎秒を超えていて、チトに關しては865メートル毎秒なので避けるのはなかなか大変でしょう。あとは機動力ですね。どの戦車も最高速度は速いですが加速は遅いというザ日本戦車という性能をしています。こんなところでしようか。」

思っていたより厳しい状況だつた。日本戦車が全てホイやホニ3のレベルだと思つていた凧からすれば75ミリメートルの装甲は分厚すぎた。戦車道ショップの店長に話を聞いて覚悟はしていたつもりだつたが、それでも予想以上だつた。

どうやつて攻略しようか考えていると牡丹が帰つてきた。

「あら、終わつたんですね。では試合場所の話に移りましょか。今回の試合会場は凧さんからの報告通り初心者向けの会場になつていました。手書きで申し訳ないですがこれが地図になります。」

そう言うとコピー用紙に急いで書いたと分かる少し汚い地図を手渡してきた。地図を見たところによると神社と町が半分半分になつてゐるようだ。

しばらく眺めていると牡丹が説明を始めた。

「提示されてきた試合会場は例によつて試合用に造られた偽物の町のようです。駅と線路を挟んで北側には神社、南側が工場や住宅街と色々な立ち回りが一度に練習できる仕様になっています。北側の神社は伏見稻荷大社を模していく見た目は本物と変わりませんが千本鳥居も本殿も全て偽物なので壊してしまつて構いません。南側も同様に住宅街も工場も全て偽物になつてます。私も衛星写真と地図を見ただけなので細かい部分は屈さんの方でお願いしますね。」

牡丹はこう言つているが、とてもありがたかつた。敵戦車の把握と地形を全て1人でまとめた場合、戦略を考える時間を取れなかつただろう。

「いえいえ。本来なら自分でやるべきことを生徒会の皆さんに手伝つてもらつたわけですから。ありがとうございます。」

そう言うと、これ以上生徒会に迷惑をかける訳にはいかないので生徒会役員達に一挨拶すると戦略を考える為に帰路についた。

帰り道でどう立ち回ろかある程度考えたが、特に何も思い浮かばなかつた。戦車一発である程度戦える気になつていたが、できるだけ平等な条件で戦えるゲームと違つて戦力差が想定外すぎて経験が役に立たなかつた。

だが一つだけ確定的に明らかなことがある。伏見稻荷大社に行くのは最終手段だということだ。伏見稻荷大社に行けさえすれば小さい車体でマズルフラッシュも少ないこちらが有利だが、クーゲルパンツァーの履帯は他の戦車のように地形に沿わずにただ回転するだけだ。バイク屋の店主に性能を向上させてあるとはいえ、不整地性能はそこまで良くない。つまり全敵車が違う方向に行くのを確認するなどで隠れるまで見つからないとある程度の確信が持てるまでは隠れるまでに撃破される可能性が高い。だがそもそも隠れても敵車が来ないと意味がない。

ならば整地された場所で戦うのが1番クーゲルパンツァーに合っているだろう。よつて南側を使うとだけ決めて後の時間は術を磨く事に当てる事にした。